



野草、チョウやトンボのクイズ番組の勧め！

（提案趣旨）

身近な環境への関心を高めるために、子どもらが草花や野鳥の名前を覚える機会を増やす必要がある。俗っぽいが、身近な動植物の名前を当てるテレビ番組の勧めである。

（本文）

「環境問題に率先する人びとを生み出そうと願うならば、環境データを覚えこませるのではなく、少年時代に、トンボ、チョウチョを追う日があればいい」と説く人は、元文部大臣の鳩山邦夫氏です。知識以上に感性の涵養が図られるからです。

自然環境に愛着を持つことが先決。そのためには、幼少から、自然、とりわけ身近な植物、昆虫、野鳥などに関心を高めること。しかし、現代社会では、学習機会に恵まれているようには思えません。

2002年9月某日、西日本新聞「秋にメジロが庭の隅で卵を孵して育てている。とても嬉しかった」との投稿がありました。私は驚いてしまいました。なぜならば、地球環境の黄信号を知らせているからです。秋の子育て、それも人家の庭で！ このところの暖かさや森の消滅のせいで小鳥もおかしいし、それを喜ぶ人の自然観もおかしいように感じました。

「母ザルが死んだ子をミイラになっても抱き続ける例は珍しくないという。こうした惜別の感情を、著者は「内なる自然」と呼ぶ。現代では、コインロッカーに子を捨てる親がいる。人間はサルから受け継いだはずの「内なる自然」の感情を、文明化のために変質させているのではないか、ともいう。

動物は個体維持と種保存の本能を併せ持つが、一般的には後者に比重が置かれている。ところが文明化した現在、人間は個の欲望を是認するあまり、個体維持に重心をかけすぎているという。豚とイノシシは同じ種だが、イノシシが適応性に富み、生命力も旺盛なのに比し、家畜化した豚は脳そのものが低質化している。管理社会の現代の子供は、いわば家畜の一途を辿っているとも言えそうで、この豚の例などはなはだ気になる話である。この動物学者の文明批判に、私達は真摯に耳を傾けるべきではないだろうか。（【学問の冒険】河合雅雄 佼成出版社 への新聞評）

「内なる自然」が失われる、もしくは、機能しないことは、人類にとって種の維持にさえ悪い影響を及ぼしかねない危険領域です。【文明栄え、人滅びる】では困ります。自然を、観念的・抽象的に把握するのではなく、汗を流して体得する、そのためには足で歩いて知ることから始めねば...

このために、子どもたちに、自然を漫然とみるのではなく、意志的・判別的に見る観察眼を身につけさせるところから始めてはいかがでしょうか。植物採集などに興味を持ってくれるだけでよいのです。少々俗っぽくなりますが、そのためのインセンティブとして、「野

草の名の当て比べ」などのクイズ番組はいかがでしょうか。

【仕掛け】については、言及するほどのこともありませんが、初等教育過程において、知識の詰め込み以上に、感性を磨くことの重要性を認め、学校その他、野外活動にて植物や昆虫採集、海や川で魚を追うとか、夜空を仰ぎ見て星を覚える、などの指導に時間を割きます。

【感性を育む】冒頭の目的・趣旨では、「身近な環境への関心を高めるため」と述べましたが、それ以上に、彼の感性を高める意味が重要です。それは、生涯を通じて彼にゆたかな人生を歩む能力を授けてくれるだろうからです。

【感性】とは、広辞苑によれば、「外界の刺激に応じて、感覚・刺激を生ずる感覚器官の感受性。感覚によって呼び起こされ、それに支配される体験。従って、感覚に伴う感情や衝動・欲望をも含む。」 ゆたかな感性がなければ、感動も少なくなる。

文学的に、「心豊かに生きる能力」とも換言される。別名、「感動できる人間性」。

参考語録：

「美しい花に感動して、目を輝かせ、感嘆の声を上げる」というのは、最高次の前頭前野機能の健在のあかしである。軽くぼけ始めたお年よりは、美しいものにも、おいしいものにもあまり感動しなくなっている。

前頭前野の機能の代表的なものとして、創造性、発想、機転、洞察力、応用、注意分配能力、注意集中力、感動、忍耐力、トンチ、ユーモア、高次複合記憶などがある。人だけが持つ前頭前野の機能低下こそが痴呆である。

詰め込み教育では前頭前野は育ちにくいだろう。発明発見に必要な右脳と前頭前野との連携を育てるには、「まず、よく遊ばせること」が必要である。米国では、「よく遊ばせることがノーベル賞に直結する」と公然といわれていたものだ。（「親がボケれば子もボケる」金子満雄 角川文庫 平成15年12月25日初版）

今の子どもたちには、遊びの要素たる、仲間、時間、空間がない。最大の不幸です。

「あそびによって、創造性を開発された人びとによって、この豊かな日本がもたらされてきたのだった。ものは豊かであっても子どもたちは幸せだろうか。21世紀の日本は創造的な国であり続けられるだろうか。子どもはあそびの天才ではあるが、それが発揮できる環境にない。その責任は私達おとなにある。…作り直していかないと、日本の未来、いや地球の未来はない。」（「子どもとあそび」仙田満 岩波新書）

